



續猿蓑

中村俊定文庫
文庫 18
136
2





續猿蓑集卷之下



春之部 花梅

鹿沼

温ふのあさきあせやまの梅	其角
覆射ふに又さき内々あさき	芭蕉
顔も似ぬちの向もあさき	洞木
ちう通物木の般うらるるあさき	みよ
角の流し入まかきあさき	

花散て竹くら軒のやすき花

酒堂

富貴なる酒なるよしあきなりて又君
の血もと解のさるるれよあき
さるるるる

酒歌なるよあきのさきと空の花

惟然

賭みしてはあきれりしるるる

支考

人のまもわく観るるる川橋

治徳

らるるやあき中一のたの水屋

猿雖

七川よりたるとあきあき申の

陽和



らるる新あきさるるや川橋

乙州

咲花をさるるさるる老木外

木花

家あきあきさるるさるる川橋

治荷

二の解やさるるあきあき調の雲

子珊

美玉のあきあきさるる橋の船

卓袋

田家

花若弱のあきあきさるるかぬ橋

李里

咲あきさるるあきあきさるる

桃首

後表下

心ゆく花のよのしし 木のぬらり
 ちこれ木の根やあらしき花の露
 花をまきまきし飯合や人老流
 くれやうたまき床あまら花のまき
 ぬり 虫は花の志あらと軒の花
 一日を花のよのあらしき花のまき
 八重様 京あもも 花のまき
 全 花園 貞良 其角 一海馬

三花菜

濡縁やみみちをわきく土のうら
 ろの海やうたのよのまき花のまき
 夕波の船よまき花のまき
 一かぬの牡丹まき花のまき

光吉 曲あま 孤屋 尾頭

梅舟柳

暮さくくまき花のまき
 多きくたやちまき花のまき

野水 其角

三花菜

守梅のあまひ業より即ち老賣 其角
 里坊の雄まゝやサシ丸の丸 鳥居
 投入や梅のおまをさ清のい 良品
 病傾のなまぬ梅のさかたか 曾え
 あまひ記のまをささし梅花 万幸
 為るや梅の清まて下結の結 魚目
 まゝ梅やまゝいまをささし梅花 千川
 覆所や梅のまあひまゝをささし梅花 大冊

天中のおし海の法て

男のままや梅の誰まゝん 遊糸
 うれし此のなりやまゝん 千船
 時こそあまゝらり川やまゝん 意え
 ろう道を教へちや在柳 と栗 李由
 青梅のまゝれくせや馬の曲 九之丸
 痛まうけてるあまゝらり梅の花 巴夫

鳥 附魚

長巻下

其角
 史邦
 智月
 芭蕉
 去来
 西堂
 傘下
 長紅

燕や田をわたりあつた鳥の羽も
 巢の中や母を御してあや燕
 雀子や姉あそび雛の棧
 雛うらにならなく雀乃子飼ひ
 けり鴨やあふよはれての磯惜み
 芳野とあはれ
 鮎の子にふすまは池の音
 わけらぬやまよらうか鏡外
 野童
 峯嵐
 槐市
 河瓢
 釣帚
 土方
 圃水

後表外

山崎
山崎

きつみぎのしんきふは波はめい
子珊

白雲のきうふゆははなぬく
山峰

深川よめくちし

きつみぎをきつみぎのきつみぎ
其角

まはちんわ

ちんわうてまきつみぎははなぬく
正秀

きつみぎをねむけつみぎの道
け筋

きつみぎのきつみぎのきつみぎ
羽紅

川流や澄まやふらふら
猿鎧

秀のゆきまやま筆の長し
鬘指

味びや橋のきつみぎあうま
車来

藤きつみぎ清のよめ鬼あ
菰雀

堤ありらうひきつみぎきつみぎ
馬鹿

疏きつみぎ上堰の切目や甘露の塔
拙俵

烟きつみぎめつみぎきつみぎ
乃龍

早蕨やまきしんわらび
正秀

きつみぎのきつみぎ肥うま
夕可

長装下

木

月の影よ猫の爪おは櫻屋敷の
浦の英やまゝの光さくは花
一桐 圃蒔

猫恋 附胡蝶

ささや月よちひ啼す猫の恋
うよ恋よあて物猫の盗喰
おもひこころにほめけり即猫小
探瓦 支考 巳百

白月志

あつりても翅を動かす柳梅
柳梅

衣まゝのうきやをさ鶴の舞
蝶の舞おつら様よこゝあこま
風吹よ舞のやまこゝ小蝶うま
こゝ新て花みちつらき切鶴ひ
惟然 園折 ち羽 二重り 雪窓

春鹿

振おりしりや度酒の席の角
沢雄

まき耕

お福のちちあてまこゝろ麻
木呂

後集下

市れや三途とよ此看月お
千州乃田をかつはかり遊ば人
一海

桃 附椿

白桃や志山くもるはるのそ
金柑をまこし蓋かり桃のそ
依んくく葉の枝の上の葉のそ
桃はくく申をくもるはるのそ
花さくく桃や奇舞妓の腸躍
其角

江東の幸由々祖父の懐のほろり
わのし経文題のち川白く一休の
光のそく事

小服綿み光をやと路むはる
桃を枯くそるはる桃のそ
取あけてるはる桃のそ
しるはるはるはるはるはる
角上
砂香
洞木
野波

歎冬 附脚踏藤

山吹や垣み千くは裏一重
園坊

田舎りくよ對して

山吹も花あらり糸糸解ちまは
垢おとれはくし糸株や解のま
家時や袖まよやうれあのをた

まら月

らの端まらちくく只かりまは月

酒堂
雪芝
荊口

魯町

まらる附春雪鑑

抱ふりよい草の社よりやまのる
あさく調子合らまよまのあわ
まらるや唐丸あらるまをまら

前口
乃龍
游刀

あまのあしはまの武江の
猿石をまらるるまらる附

まらるや花の川らくくしんじ
まらるやえくくくくくくくく
清雪やまのまらるくくくくく
りけくくくくくくくくくくく

支考
柳首
風香
風睡

後表

波干

乃ちあり枕の清涼いさるれぬ波干

去来

み川よ富士の麓やふきおひの

園坊

雑春

出あいらやあしれ袖らも加帳

許六

ささるのやあしと静ら桐乃苗

風睡

思おこの松のうらやわり緑

土芳

つげらぬや麓の藤の掛ちあ

配力

山まを花ちあはのうらや瀬治家

万平

あしに招治や思もや市に申

玄昇

おの穿し川雀あしあけ糸

坊水

まらの日やさ糸の申はあはら

正秀

とく人の舞あはら申あはらの池

仙化

りらあは申あはら申あはらの池

文流

三月巻

解しおまを白濁賣れ名跡うら

支考

目録

さくらやもたらしくくくくくくくくくくくく

武仙

遠くを舟のすゝれ立所外

百歳

さくら報をきくての甲斐は

尚白

夢遊東のりくくくくくくくくくくく

團扇

母方の娘もくくくくくくくくくくく

山崎

つらみつらなを顛倒しとくくくくくくくくくくく

えぬやあかしくくくくくくくくくくくく

千川

人ともぬまらや後のくくくくく

芭蕉

明らわのちのうた娘あかしく

其角

楳のせにゆまうくくくくくくくくく

嵐雪

さくらやあかしくくくくくくくくく

去来

さくら橋んすうらぬぬよこる

土芳

くくくくくくくくくくくくくくくく

風騷

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

猿蓑

後集下

上

子作のまをす川也 鴨也 藤原の
 背さるる 鴨の 鴨の 鴨の
 山田の 鴨の 鴨の 鴨の
 縁の 鴨の 鴨の 鴨の
 川 鴨の 鴨の 鴨の
 枇杷の 鴨の 鴨の 鴨の
 世の 鴨の 鴨の 鴨の
 濡い 鴨の 鴨の 鴨の

鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原
 鴨原

えりや 鴨の 鴨の 鴨の
 我々の 鴨の 鴨の 鴨の
 鴨原の 鴨の 鴨の 鴨の
 鴨の 鴨の 鴨の 鴨の

竹
 是
 池
 圃

後集

五

まゝ部

部

曉の雲をほろめやあゝ〜

其ノ用

けと〜おん〜
瀟水のそ〜

文子

あ〜
何をたはらふ

曾見

蜀隈〜
お志し〜

支考

鳴瀬のなまや珠〜
あか〜

如雪

燕の居が〜
あ〜

其ノ

淀よりのおもひよなげし子規

けりるる山の紅葉ありて

順れり吹て通りらるる

静るあそびの森や中やとり

沾圃

木附草花

橙や月あつたれとるまあこま

園捐

里しの次ずらりぬる川あたら

野萩

園中 二句

は中の古木をいりぬ掃のる

け筋

手切のきこ木も掃のるまふ外

千川

蛸百合や上ありさあは蝶のふ

孝龍

豊山 蛸と百合

あつちやあつちやあつちやあつちや

支考

山もんよのうれてあつちやあつちや

尾張

冷汁をあくすあつちやあつちや

沾圃

色のももれぬ像くれし杜若

イカ 宇多郡

あまのや 茄子のたをまきく

拙後

あまのやのたを

昼うちや 月をたれもた盛

沾圃

夕朝や 酔てうちた意のた

芭蕉

夕わや 襦ておきてあま

嵐

藤のたあらしきあま入江

妹香

葡萄のたにたてし水の浮り

け筋

蓮のたあらしきあま水離

る雪

客あらしきつよ蓮の鏡あま

良品

瓜

朝露のたあらしき瓜の玉

芭蕉

姫あらしき神あてのま

至曉

たん

あまのや 膳をたれぬ牡丹

風弦

子苗

後表下

涼—さし牛乳危振て川の申

万幸

漫真 三句

腰かけて申に涼—と階子外

酒屋

涼—さや椽より豆をぬくまら

支考

生碎をゆらばくあくろ涼うら

雪文

とくひとぬき

世屋よおひきて

涼風もあま—と登りのこわれり

游刀

いそか—夷申をぬげとろ涼うぬ

全

立向りく人のおまねてすまらぬ

去来

黙然よこあら涼—やぶの上

正秀

穢人の帷子とて夜々よみ

土芳

涼—さや一きね穢の風もあま

我眉

お涼やさしひのこ世を月かき

里圃

盛二五

かこもや照りあはし座の隅

野菰

木子盛らん世のちいさの暑者外

万幸

後集下

五

最悪者の心ざしをいふ
よき心はつた

うきものやうきを捨てて静かなる心

正秀

取替の酒のあつても梅はくひ

乙州

煤とらふ由は思ふつ——王新

怒風

女流の垣も志ありぬ君有る能

我峯

糸のそとに君をよむにわかつた

我峯

何よりやと問ふとくはなれちて

下宮

積あけて思ふはなれちて

早宮

粘よから船もよの宿つさう能
立寄れさす川とらやの暑
舟のこゝろ

里東
沼園

昔にぬくさうく岸の宿るな
そりや烟の心川ら庫裏の窓
五月雨附々立

可誠
曲翠

あつた心もあつたのうちに
さうなれや髪がふ素乃烟

不王
芭蕉

後下

み月もや隠れぬ蟬はさむ

沓園

夕立よここし合傘り自傘

拙依

白もや運のまふく池の

玄呂蘇

夕くらやちりけり行のは

曉鳥

ゆめまら傘あらしやもつ所

圃水

蟬

白もや中房りて蟬のあし

正秀

まじりて蟬のあし

胡政

森林の蟬声よふぬやういふ

乙州

曉鳥

のり

露の目や潮さるるは蟬

葉拾

雑

ささげの葉をてまの動やせし

枚風

虫のさるる葉やせし

荊に

る獲とみうひの甲のちやひり

知真

後家下

川橋よらへ

まら焼やまわらへて橋籠

文鳥

異の草にまらへてや園のまら橋

葛草

夕園まらへてもまら酒まら

水鷗

おもしろいよまらまら
やまらまらまら

魚阿のら草もあれ造ららハ

馬見

梅まらまら荒かへまら目の回

まらまら

澤得や送付くゆらるるのまら

野まら

橋中まらまらまらまらまら

水鷗

晋の園まら
まらまら

まら形よまらまらまら

芭蕉

粘らりな惟子あらまらまら

惟然

まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまら

惟子らまらまらまら

まら

穂う部

名月

名月に蘇の香かた田のうら

名月の花うをてて穂高

う。一を伊賀のふ申み一て名月の
おこの二句をう一あ一てうら穂う
うらねう非うんと侍一にけらわ
つううた月をす所う根のうう
うらよらうらうらうらうらうら

後

正

うらと因位あ——のめつりよんは
昔をさす方後をさすりて平回
勝しとさすらるるを若杜う唯を
あめつりてさすりよもつちんちん
↑さすりの掃きけさすりて
備よしてふとさすりて今の
この所の一海は海ついで月
うらつりてさすりてさすりて
さすりてさすりてさすりて
さすりてさすりてさすりて
さすりてさすりてさすりて
さすりてさすりてさすりて

き前ハ寂冥をさすりて一はを風無を
あつりてさすりて五つりて何る是非を
さすりてさすりてさすりて
さすりてさすりてさすりて

支考評

名月の海より冷ら回葉う能 酒堂
明月やあよあれを飯屋のつら 知行
さすりてさすりてさすりて 秀店

後表下

世

山も此ら山ももほめおの
 名月や甲のあぢいのまき子木
 場に居て月えかゝも遠磯
 明もやあしわかしに女沖方
 明も何もちうり尾おの道
 船入り客よもいひ月えか
 舟りのるあこよけて月えか

後所のちかおのよ
 ちかおのちかおのよ

宇比

木枝

利合

丹楓

野萩

正秀

大孝

待宵の月に居てや空の影

景秋

家よら老女とつかきあり亡父
 お監り秘しはくはく
 あわしひもて

姨捨を

園よのちちやりのあ

依圃

露おきて月入あやも堀のま

馬寛

まろく月あこもぬ梢外

里東

月影や海のちちりも二扉下

牧童

後巻下

七五

保川の東ふちをたぐり所よ
おとろーて

川ふちこの川きもや月のな 芭蕉

十六あまり川うら園のあめ 全

ふいよひの園のあもやうのた 猿轡

セタ

うらぬおののふのあ海の河 惟然

四斗合ふらふもくね朝の守 啼きか

船船のやまきり〜わあかか 東圃

ふたふた〜いさ〜いさ〜 糸の〜あ〜ふ 花園

おののや薫姫の園もり 乙州

立秋

つるまぬうやなほよけよはとねの 霧川

あ〜川や申のあま〜やあはま 老次

三橋

おのののたを透るるは桔梗の船 桔梗

あ〜にものち〜ぬ桔梗のつら〜ひ 逸友

後集下

チのたねわひぬ馬骨の筈の
まゝにたねし移後の杖のくみぬ
一篇をうたふるよちりし 烟を
う固とら比りぬやなまらぬ

渭子
馬草
鳥粟
支浪

贈芭蕉序

面合をるる夏夜を終る余も
はよ姫のちやまもはしはよ
枯のちやまもあをわくしや 芭蕉序

風妻
史邦
万平

鶏頭や序の末は時なぬあし
鶏頭のあつたまきぬ月影の
折しや雨戸にまはる秋の
まはるあつたまきぬ秋の風
山人のこゝろを時なぬあし
風舞よ長らくはるるあつた

芭蕉
至曉
雪之
荷毛
加^加中
桃妖
杉下

物類のまをわくしや 芭蕉序
お上尼

後集

廿六

あまのこゝろの信ふてきくはく極る
ふもあまのこゝろのこゝろの湯の舟
朝空にまをれし人ぬ髪帽子
其角

虫 附鳥

こゝろに 此傍に経る可南
電馬や形もあつてぬらう棚
火の清て胸入すふり虫のこゝろ
秋のぬやまも新とまゝしす
このまや形もあつてぬらう棚
杜若

蟬のや何の味ある草の先
蟬のや服もあつてぬらう棚
蓬のまに髪もあつてぬらう棚
ぬげあつてよまゝひて死る秋の
尾まにゆゑに浦のまをれり
鶴鴎やきりまゝはる川原
葉の粒もあつてぬらう棚
老の名もあつてぬらう棚
探丸
葛葉
示峯
天子
馬寛
水固
支考
芭蕉

後藤下

三

後風

秋の物や二事回なほそよみ好む時
 雀子乃り替もこころや秋の風
 何なりとあはれうしり秋の風
 松のまふや思ふものぬれ秋の
 ちのつらうし平のまはる思ふ外
 思ふまふ思ふまふ思ふまふ
 あれしてまき海なり思ふ分る

遊口
 式之
 支考
 風国
 圃無
 ぬれ
 猿雖

稻妻

独りてる守しものこしし稲の原
 稲妻やらふ魚と海海のと
 思ふものや稲つはるるるの端
 思ふはまや園の方なり又位の

一東
 宇比
 土世方
 芭蕉

木實 附 蒲

園の木のまはるておぼりるおまけ
 炭焼にほ柿たのむはるる

為有
 玄虎

秋の月和らるる尾掃のりり 西堂

ほゆるしき雲帯ももろく極く小 きのあま

ま川草也塩もほつた一盞 沓圃

伊勢の山中甲よ阿波の
東の南を結して

松草也起のりり山の形 惟然

~~松草也起のりり山の形~~

ま川草也まのぬ木のまのぬりり 芭蕉

楓

後庭の塚よとれり村のま 小鯉

麻

庵すちにおぬの麻也ぬのま 風睡

庵わらうよ麻おらう守のまよ 一敵

農業

起しほくを迎りりまらまの 車磨

木の下に程やらうの程もぬる程 貫山

さほらげらるるもぬるまの 田舎の程 知雪

田舎の半後よ
らるるまをとりれて

若らうまをヒシメもフナかきこゑたてめてたんだね
 早稲刈て落つよりあや小百姓
 山雀のやまもつた叫ヒシメおれの福
 子居りよさじに河るふヒシメ鳥フナもらわす
 一おれのまもあや平らうとんとり
 肌ヒシメもつたあやありフナまの
 百なりりていヒシメくくおそフナにわ
 大御河原のあやひてヒシメ橋フナと
 つかひよのヒシメ橋フナもあひら
 そのヒシメはらあやフナもつたあやの種
 芭蕉
 乃龍
 斗從
 支考
 全
 惟然
 本名
 佑圃

菊

菊ヒシメ平フナ二百十月もヒシメき
 ちあやヒシメもつたあやとフナの玉牡丹
 者ヒシメ大木綿のあや下フナにヒシメき
 野ヒシメ益フナ屏
 若らうまをヒシメもつたあやフナのあ
 借りけヒシメのあやフナのあ
 暮ヒシメ秋

野水
 乙州
 芭蕉

雑稿

又六十海をばるて殺いつ
 之道
 團友
 畦止
 比友

男婦多しに花のさちちる、初小
 萩子
 万幸
 宗波

柿の葉に焼くを事せん所等
葉川
 宗波

いらん馬の空に骸骨やとて
 の笛鼓をうやめてはゆるる
 やまを盡して舞臺の燈あかり
 りさひりあるとんけらあかり
 ありあねやとハハ此あそひ
 みほらんやかの骨髄を後
 かき——て孫よまゝさうつか

わんわんわんわんわんわんわん
きんきんきんきんきんきんきん

ハハハハハ

稲つぼやうおのちんちん

稲の穂

みんご部

附霜 附霜

られ比の垣の残月やう附霜
まられ比の又松風のほろり
りかいらい人もやう附霜
一時あおころりまらく日影外
ゆーらぬ少溜の草花者大に減

野坡
水枝
芭蕉
露沾
馬草

長巻下

三

平押ふぬる回らう時あふな
 柴賣やうくきくの葉廻り
 梳賣もあふ空牙のぬけ
 沓熊のもてきりぬけぬ
 うらやわや鏡めうらう
 ふよ並て赤野をぬけぬ
 柿包山目あもやうぬ
 うらうらうきりぬけぬ

野明
 園指
 空牙
 ぬ有
 鶏に
 野萩
 赤川
 里園

仲西の能目うらあはぬ
 うらやわやあぬぬ
 うらうらうきりぬけぬ

池圃
 水鏡
 支考

元禄辛酉うらぬ
 九月あまの園遊

うらぬの園遊あまの園のりぬ
 うらうけはらうらぬぬ
 うらうらうきりぬけぬ

後集下

あゝ〜〜竹の葉物と云ふはたゞ
あゝ〜〜竹の葉物と云ふはたゞ
あゝ〜〜竹の葉物と云ふはたゞ
あゝ〜〜竹の葉物と云ふはたゞ
あゝ〜〜竹の葉物と云ふはたゞ

芭蕉

葉の葉や一庭よ切らるる後の庭

柚の色や起あがりらるる葉の香 其角

葉の氣味ぬる境や萩の 柳隣

八尋の葉や何つあらるる葉の香 沼圃

何處の葉や〜〜にまゝん葉の枝 菊

葉の葉も圓知を手に取り 馬寛

葉葉の隠土可〜〜のぬるるを欲〜

あゝ〜〜葉の輪のちり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

あゝ〜〜葉のまじり〜んま

くろくくとぬ響くや作ぬるものな

車窓

草 附木

みねや孫唄の如く月の透り

曲翠

はなは清く咲やふおわりの水は花

氷固

みねのわたの〜〜れや萩の如く

惟然

花露 越前 山家集の題より

一葉もこころをぬる事の氷く南

芭蕉

山を赤花をえりり開くゆり花

車廂

みづ梅のちよ川ゆ〜川や鳥の

土佐

山を赤花もはるや雪は存株

露草

木 附冬枯風

おもひなり木のをふら〜木や雪の

治徳

星さ〜て江の潮ち〜下雪あかり

露沾

冬川や木のをふら〜雪あかり

惟然

杖ふるり足さつりあつてあの暮れ

杖風

いづれか字比の
なまこめこして

とらふり先かてとらふるふか

一道

枯さていぢれよとらふれもさへ

杉風

牛のけり返る杖ののこりか

柳酔

冬枯れまきこまてんこらなび

乃龍

草枯れ手く川てきくぬり

利牛

即ち枯てのこたおちかき

支考

木かすもさるもさるなむき

智目

風や背中吹く牛らあ

風行

木枯れ川回の時カサケの候

唯然

こかすもさるもさるなむき

塵生

夷講

あひす梅酢賣み禱るせみ

芭蕉

あひす梅酢賣み禱るせみ

利合

後集

六

鳥 附いま

乃々の海まこて

塵埃よめぬ日ちりー浦歌 白空

追うけて雲よころか千鳥の南 葛草

かあらとると庚申やら花あを飛 ぶ草

入海や碓の釜に筆 千鳥 園指

筆テニロモにけしきとぬくー鴨乃冬 芭蕉

と山鴨を大遠うくらけしきと水 乍木

扱はよとらひ入つよと海嵐を 三人 利雪

うらうらや海月よあらやあまの 車扇

ふく透や子持ひあのうら氷 付水

一握よと川魚や雪の前 杉風

かくぬけや脈をわして降雪 拙作

杜夫魚を河豚の大さまで水上はあふ
翅の川よのくあらくまやう

冬月 附会

管とのや門賣ありくあきの月
 里圃
 あく橋のかけわた軒やあきの月
 夫孝
 何まよと藤乃今まてかり強ぬまゆ
 力春
 むいぬやけをぬれを江の月あ
 支考

埋火

埋火の母らおき客の歌あり
 芭蕉
 佛一さるあふさきぬら火燈
 桃先
 自由の月もぬらかりまら燈
 洞木

雪

幼き物行に橋あり夕らるる
 其角
 ぬらぬら 月雪うすま酒の味
 全
 雪あふぬらぬらぬらぬらぬら
 夕景
 鳥鶴のぬらぬらぬらぬらぬら
 祐甫
 雪垣やまぬらぬらぬらぬら
 芭蕉
 ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
 支考
 片羽や雪降あらすまの俵
 圃吟

馬のしんりのまゝんや月枝のあけ
髪利を降ふるまゝんや
伊加え大和のまゝんや雪のた
配力

神樂

おゆふに萬と
史部

神さしよ

合言わたりりり子の洋和
神めり干筋賣ますりり
娘入のりもさりり
浪を送りたるり
路子
馬見
許六
佐團

煤掃舟辭つよ

煤掃舟あはれ
煤掃舟あはれ
舟
孫香
黄逸
深湾
馬見

後藤

花

燦々わたりしりておろすか
 蝶掃也折る一牧疏く
 餅つふや火あかして男遊を
 餅はまやあうらうの鶏の
 ちり搗の手傳ひまや小山伏
 歳はち 附言まよか衣配
 とおろした返も海きの市のとほ
 内砂やおきてまよの洗ひ髪
 里東 角丸 馬佛 嵐堂 黛水 惟然 白如

賣ふやと引ても
 袋もおよのちり
 大子や款子き
 袴まぬ舞入も
 年の市術を呼
 おろちた小豆
 川流の一は
 桶の輪のち
 草土 車耒 一万半 李西 具角 正秀 狹子 袋錐

天鵝色のさしぬさあしてゆのき

惟然

後秋よ葉を踏みてさしぬのき

けらるる圖司呂ぬる母とささりあはれ
のささるとして伊勢もよしあして侍らぬ
いさぬゆゑのささりあはれささるひ
あして今をわらふ

くささるる

盗人よあめこおもありゆのき

芭蕉

余所よさゆてさしぬのき

支考

ぬにさゆ所あはぬゆの甲

土芳

ささるるゆゆ弱りてゆる霧の中

高白

ささるるゆゆの指子あはぬゆのき

楓後

裁るる指を束の子とていさぬ配

山峰

一志ささるるゆゆて静るる陰の鶴

利合

雑文

巾着風にさすを挽くささるるゆ

斜嵐

拙作よ何風ささるるゆの端

土芳

井のあめあはれささるるゆ

土下

仙杖
 圃仙
 雪堂
 口谷
 沾圃
 杉風

釈教之部 附 追善 哀傷

涅槃木

涅槃像ありよき身も同
 孫とん命や般乎合る珠の
 山寺や猶守る所なむ像
 貧福のあしと山志るも涅槃像
 法圃
 芭蕉
 不撤
 山蜂

灌佛

後接下

111

権仙やほろほろあつぬら井戸の
家花や仰うまれて二と目
権仰や頼迦と程婆を従弟と

曲
不玉
之道

云惠各帝

冷物もな水とほく一課あり
平傳りたりのあこしやうと課ある
やは休物場とひるをふとふ

嵐
去来
法圃

甲戌のなち庫のけしをこの

かゝのいふより消息きつれり
と四里よぬりて盛會よふ

さゆまゝなほよき〜繁の墓とふ

芭蕉

悼少年 二首

うた〜さや麻木の葉もかた
その親をきりぬるの子を秋の風

唯然
支考

うは〜は
秋の風に訪て

首のたを稀葉のさくらこの時り

木花

さくら木 掃きぬきと皮桶の水 去来

法苑珠林

柚も柿もおろすれぬなり 法苑珠林 法園

臘八

鶺鴒 さとさとりてとれぬ豆汁 許六

何のあはれかのあはれとりのそと師傳 知行

雜言

洛東の真如堂に

善光寺 妙法蓮華の時

涼しきも野山よもはるかに 去来

みづもやまのこゝろにききけり 智月

けしきもやまのこゝろにききけり 乙州

さよふに川趣向もや富まむ 多知子

手まもりに朝の月涼し 野坡

食堂に雀啼たり 夕射ぬ 支考

後撰下

四言

旅之部

送別

え禄七手のまゝさるるの
あまはえ送りて

まぬくに歸るのるん世のふくね
ふらや柿喰ひあうらうのど

許六

本常流におまらう時

旅人のちるるはもの似よ推のた

荷号

惟然

芭蕉

留別

後の惟然々空あり

右帰めゆき付

嵐やもあきの草むさかしくり

文子

鮫の子はまじく魚送るふのり

芭蕉

甲斐のこの島は訪らる付

乙那のらぬにかなて

年ありて牛にやうりらるる草むさかしくり

木下

船はあはせまきくろくはなはら

類人

めくもたうくつるる川橋た旅の石

野徑

あめの國のおもひ

あめのこのさくしをこて

ろはくまを谷地なりけりわむら

公卿

十圓子のわはなふちりぬ秋の風

許六

大名の戸櫓なりにもねくろくをな

全

くはなはら

くろくしはもるあもさくしはぬあまの猿

車馬

ほくろくまを土てうぬらるる木下

猿雞

あまのまくめらるるくはなはら

我峯

おちろいほをきておはあつ—
田國の心さ—も御しく伊勢の

史邦

又之巻の巻ち〜けを秋涼—

立人
呂丸

我蒲團つ〜の旅の巻〜

法團

常陸の國が—あひとらふ所よ
りまゐておとらあんと—に
そのおちろいほをきておはあつ—
つ〜の巻ち〜お別れの巻の
下におちろいほ—

根のちほら情や林にせは粥
と川魚や道よ〜お枝もと

支考
全

え禄と巻のみ〜葉はの葉あり
あり武によおちろいほとて巻の
の驛 巻を—おちろいほと

宿かりて名をちの〜

〜おちろいほ

〜おちろいほ

後巻下

〇〇〇〇

續猿蓑を芭蕉翁乃一派にす
何人の撰といふを志すに於て此の
傍伊賀と書し乃見松尾の
此評あり某書に於て
漸く日本の世を
世に於て
或いは
くは

表下

四七

一季のことは一切をあらたに可なり
乃書くは自然をいへば子孫の
とふもあし

元禄十一夏

かろく

北三郎



又日吉口

